

処方番号：26

処方名：乾姜人参半夏丸（かんきょうにんじんはんげがん）

処方構成：

乾姜 3、人参 3、半夏 6

用法・用量：

（1）散：1回 1.5-5g 1日 3回

（2）湯：上記量を1日量とする

しぼり：

体力中等度以下から虚弱で、はきけ・嘔吐が続きみぞおちのつかえを感じるものの次の諸症

効能・効果：

つわり、胃炎、胃腸虚弱

原典：金匱要略

出典：勿誤薬室方函

解説：

小半夏湯の去加方で、生姜を去り、乾姜、人参を加えた処方である。つわりや頑固な嘔吐に用いる。

## 26. 乾姜人参半夏丸

参考文献名	乾姜	乾薑	人参	半夏	用法・用量
処方分量集	3	-	3	6	(丸料として記載)
診療の実際	3	-	3	6	(丸料として記載)
診療医典 注1	3	-	3	6	(丸料として記載)
症候別治療	1	-	1	2	以上を粉末とし生姜の汁を加えて米糊で丸とし、1回3宛1日3回服用
処方解説	-	-	-	-	
後世要方解説	-	-	-	-	
漢方百話	-	-	-	-	
応用の実際 注2	1	-	1	2	
明解処方	-	-	-	-	
漢方処方集	1	-	1	2	生姜汁を加えて0.3の糊丸とし30丸を3回に分服
漢方入門講座 注3	1	-	1	2	左の割合で粉末とし、ひね生姜の絞り汁を以て丸薬とし1回2ずつ1日3回服用
新選類聚方	-	1	1	2	左三味、末とし生姜汁で糊丸とし梧子大のものを10丸1日3回服用
漢方医学 精撰百八方	3分	-	3分	6分	以上を粉末とし、米糊で丸とし、1回2を頓用
古方要方解説 注4	-	3	3	6	左三味を細末にし、生姜汁及び糊を以て丸となし1回4を服す。或は水煮し、生姜汁を合して服用するも、亦可なり(通常1日2,3回)
成人病の漢方療法	-	-	-	-	

〔注1〕 嘔吐：頑固につづく嘔吐，殊に妊娠悪阻の嘔吐に，乾姜人参半夏丸に烏梅丸を兼用して著効を得ることがある。金匱要略には「妊娠，嘔吐止まざるは乾姜人参半夏丸之を主る」とあって，小半夏湯，小半夏加茯苓湯などを用いても止まない嘔吐に，これを用いる。

妊娠悪阻：時期を経過し，やや重症に陥り悪心，嘔吐が長く続き，全身衰弱の徴候が現われ，腹部は軟弱で，脈も細く弱く，飲食するときは忽ち吐出し，食事も服薬もできないというものによい。

〔注2〕 消化機能が衰えて，みぞおちが硬く痞え，嘔気，嘔吐が止まないもの。崇蘭館試験方口訳に，嘔吐して湯薬をきらうものにこの丸を用いるとよい。煎剤でもよい。

〔注3〕 つわり 「妊娠，嘔吐止まざるものは乾姜人参半夏丸之を主る」（金匱要略妊娠）つわりの聖剤である。つわりだと煎じ薬の臭いをかいだだけで胸がむかつくという人がある。その時は実に有難い処方だ。つわりには本方の他，小半夏加茯苓湯，生姜半夏湯，四苓散，半夏瀉心湯なども使う。

〔注4〕 故に方極にいわく「嘔吐止マズ，心下痞鞭スル者ヲ治ス」と。此の説，能く本方の効用を約言せりというべし。

処方番号：27

処方名：甘草湯（かんぞうとう）

処方構成：

甘草 5-8

用法・用量：

- （1）散：1回 0.5g 1日2回
- （2）湯：少しずつゆっくり飲む
- （3）外用：煎液で患部を温湿布する

しぼり：

体力に関わらず広く応用できる

効能・効果：

激しいせき、口内炎、しわがれ声

外用：痔・脱肛の痛み

原典：傷寒論

出典：

解説：

『傷寒論』の少陰病条下に「咽痛の者は甘草湯を与うべし。差（い）えざるものは桔梗湯を与う。」とあり、咽痛や急性咽頭炎などに繁用される単味の方剤で、忘憂湯又は独勝散とも云われている。甘草は急迫症状を緩解する薬能があるので、咽痛だけでなく、広く皮膚や粘膜の疼痛のはげしいとき、たとえば急性の激しいのどの痛み、激しい咳、急迫性の腹痛や歯痛、痔疾や脱肛の耐えられない痛み、打撲などによる手足の刺すような痛みにも即効がある。従って内服剤としてだけでなく、煎剤を温罨法として応用することが多い。

## 27.甘草湯

参考文献名	甘草	用法・用量
処方解説 注1	8	*1
古方要方解説 注2	8	
漢方医学 注3	8	
治療の実際 注4	8	*2
漢方大医典	8	
漢方入門講座	2	
漢方処方応用の実際	6	*3

\*1 水300ccで煮て200ccとし、100ccずつ服用、また外用として、温罨法とする。

\*2 咽頭がいたむときは、しばらく口中に含んでいて、少しずつ嚥下するようにするとよい。

\*3 一日2回服用

〔注1〕 独勝散、忘憂湯の異名あり。すべて気逆(神経の興奮)による急迫症状を緩和するに用いられ、胃痙攣にしばしば使われる。また炎症や腫瘍等の症状は軽く咽痛の激しいもの、痙攣性に咳嗽の頻発するものなどに内用する。また痔核、脱肛で急迫し疼痛の甚しい場合や陰部の腫痛あるいは瘙癢の甚だしいものなどに、外用温湿布として用いる。急性咽喉炎、胃痙攣、痙攣性咳嗽、歯痛、窒息、尿閉、排尿痛、嘔声、薬物その他の中毒等に内用、刺痛、痔核、脱肛の疼痛、潰瘍痛等に外用する。

〔注2〕 咽喉急迫を緩和し、その疼痛を去る。病勢沈滞の外観を呈し、咽喉に急迫して疼痛する者。

〔注3〕 目標、急迫症状のはげしいもの、応用、急性の激しい咽喉痛、急性の激しい咳、急迫性の腹痛。

〔注4〕 急性咽頭炎の初期で、急にのどの痛くなったものによい。疼痛のはげしいものによくきくが、はげしくないものにもよい。咽頭が乾燥した気味でいたむものによい。腹痛に用いて著効を得ることがある。最近甘草湯が胃潰瘍にきくといわれるようになったが、甘草はすべての急迫性の疼痛に用いられる。胃潰瘍で疼痛のはげしい時、甘草だけでも疼痛は緩解するが、これで浮腫があらわれたり、血圧が高くなったり、胸やけを訴えるようになるものがある。少陰病では新陳代謝機能が衰え、手足が冷え、脈が沈細や生気に乏しいという症状がある。

処方番号：28

処方名：甘草附子湯（かんぞうぶしとう）

処方構成：

甘草 2-3、加工ブシ 0.5-2、白朮 2-6、桂枝 3-4

用法・用量：

湯

しぼり：

体力虚弱で、痛みを伴うものの次の諸症

効能・効果：

関節リウマチ、関節痛、神経痛、感冒

原典：傷寒論・金匱要略

出典：

解説：

この処方『傷寒論』の太陽病下篇と『金匱要略』の痙湿喝病篇を原典としている。太陽病下篇は、病気の進行状態から、または体質として、または治療を誤ったため、体内に熱や寒さや湿気が生じて、それと外からの傷寒とが一緒になった病状を述べている。痙湿喝病は破傷風のような痙攣の病気と、湿によって起こる神経痛や関節リウマチのような病気と、日射病のような病気を書いている。この両方の篇に「外からの風（寒）と体内の湿気がいっしょになると、骨の関節が痛み、ひきつれる痛み、それにより屈伸をすることができない。ちょっと触ったぐらいでも痛がる。汗が出る。呼吸が荒く息苦しい。小便の出が悪く、悪風があつて服を脱ぎたくない、或いは体に微腫のある人（意識）」と同じ事が書かれている。臨床では神経痛や関節リウマチなどの身体痛以外に、くしゃみ・鼻水などにも使われている。

## 28. 甘草附子湯

参考文献名		甘草	附子	炮附子	白朮	朮	桂枝	用法・用量
漢方診療医典	注1	2	0.5~1		4		3.5	
漢方処方応用の実際	注2	2	0.5			4	3	
臨床応用漢方処方解説	注3	2	0.5~1		4		4	
傷寒論入門	注4	2	1		2		4	*1
傷寒論梗概	注5	3	2 (初0.3程度)			3	4	*2
金匱要略入門	注6	2	1		2		4	*3
新版漢方医学	注7	2	0.5		4		3.5	
症候による漢方治療の実際	注8	2	0.6		2		4	
漢方と民間薬百科	注9	2	1		4		3.5	
漢方治療百話	注10	-	-		-		-	
経験・漢方処方分量集		2	1			6	3.5	
改訂新版漢方処方集	注11	2		0.6 (又は白川 附子1)	2		4	*4
漢方入門講座	注12	2	1			2	4	
増補改訂漢方入門講座	注13	2		0.6 (又は白川 附子2)	2		4	
新撰類聚方	注14	2両	2枚 炮去皮(0.6)		2両		4両	*5
漢方薬入門	注15	2	1			6	3.5	
漢方あれこれ	注16	-	-	-	-	-	-	
現代漢方入門	注17	3	0.5			4	3	
漢方精撰百八方	注18	2	0.5~1		4		3.5	
成人病の漢方治療	注19	2	0.5~1		4		4	
1000万人の漢方診断と治療の実際	注20	3	0.5			4	3	
実用漢方療法	注21	-	-	-	-	-	-	
明解漢方処方集	注22	2	1 (10.5)			4	3.5	

\*1 以上四味、水600錢をもって煮て300錢となし、濾過し100錢を温服すること一日三回せよ。

\*2 右四味を調合し、水約一合二勺を以て、煮て六勺程となし、滓を去って一回に温服する。(通常一日二、三回)

\*3 以上四味、水600錢をもって煮て、300錢となし濾過して、100錢を温服すること一日三回せよ。

\*4 水240を以て煮て120に煮つめ滓を去り一日三回に分服。便法：水半量常煎法

\*5 右四味、以水六升、煮取三升、去滓、温服一升、日三服。

### 注1

- ・風と湿との衝撃によって起こるはげしい関節の疼痛を目標とする。
- ・平素から水毒のある体質の人が、外邪におかされて起こる病氣、例えば関節リウマチまたはこれに類似の症状を呈するものに用いる。
- ・急性関節リウマチで、疼痛がはげしく、関節が腫れ、悪風、尿利減少などの症状のあるもの。
- ・リウマチ、神経痛、感冒などに用いられる。

### 注2

- ・四肢の筋肉、関節の急性の激痛。
- ・痛くて手足を動かすことができず、甚だしいときは、他人がさわることもできない。
- ・息がはずみ、汗がでる。悪風があつて、関節が腫れ、尿利が減少することもある。
- ・桂枝附子湯の証に似ている。そのちがいは、桂枝附子湯より症状が重く、体力が低下して虚している。(崇蘭館試験方口訣)
- ・急性リウマチ、神経痛、インフルエンザ、感冒

注3

- ・主として急性関節リウマチの疼痛の激しいときに用いられ、また急性、慢性関節炎・淋毒性関節炎・結核性関節炎・神経痛・骨髄骨膜炎・腰痛・筋痛・ヒョウ疽・脱疽・流感などにも応用される。
- ・急性リウマチなどで疼痛がすごく猛烈で、骨節ともに痛み、関節が腫れ、悪風・自汗・利尿減少等の症状のあるもの。
- ・脈は大体浮で虚し、数、あるいは大きくて弱い。腹症に特有なものはない。

注4

- ・風と湿が同時に原因となって、骨や関節が疼痛して、そのために煩を訴え、筋肉は攣縮して痛み、屈伸することが出来ず、之に触れるときは特に劇しく痛み、発汗して、呼吸は短少となり、利尿は不良、悪風を覚えて衣服を脱することを欲せず、時として全身に軽度の浮腫を来す場合。
- ・本方は関節炎で疼痛の劇しい場合の証治を論ずる。

注5

- ・風湿相激して、更に深く迫り、骨節煩疼、掣痛して屈伸することが出来ず、自汗が出て短気し、或は之に浮腫を兼ねる等の証。

注6

- ・風と湿とが原因となって、骨及び関節が疼痛し、そのために熱く感じて苦しみ、痛のために運動が牽掣せられて自由に屈伸することができず、関節に触れるときは痛は一層劇しく、服薬しないのに発汗して、呼吸は短少になり、尿量は減少して、悪風して衣服を脱するを欲せず、或は全身に軽度の浮腫のある場合。
- ・リウマチス熱の一等劇しい場合の証治を論ずる。

注7

- ・四肢の関節の激しい疼痛。痛むところが腫れることが多く、高熱の出ることもある。高熱の出る時は、寒気がする。そのときは汗が流れるように出て、尿が減少する。
- ・急性関節リウマチ
- ・急性多発性関節リウマチで激痛を訴えるものに用いる。おかされた関節は発赤腫脹して熱感があり、患部に指頭や衣服が触れても激しく痛み、屈伸のできないほどで、悪寒がしたり、熱が出たりするものによい。

注8

- ・関節リウマチで疼痛のはげしいものに用いる。

注9

- ・急性関節リウマチで、痛みがひどくて耐えがたいもの。悪寒と高熱があるようなものにもよい。熱のある場合は、多くは汗が流れるように出る。それでいて悪寒がする。このようなときは脈が浮大数となることが多い。
- ・四肢の激しい疼痛。発熱と発汗と悪寒があつて、尿の出が少ない。痛むところがはれることがある。
- ・急性関節リウマチ、神経痛、流感

注10

- ・常にアレルギー性鼻炎で悩んでいたが、風邪をひき、くしゃみが多く出て背中が冷えて、ぞくぞくし、涕水と涙が流れるように出て、脈が浮で頭痛と上衝がある。このとき甘草附子湯を用いたところ即時卓効があつた。(藤平健氏の治験)

注11

- ・関節劇しく疼煩して屈伸することが出来ず、汗出で短気、小便不利、悪風或は身微腫などあるもの
- ・急性関節炎、ひょう疽、神経痛、化膿症

注12

- ・関節の劇痛を治す。
- ・脈浮軟
- ・急性関節炎

注13

- ・表の虚寒と水気の急迫上衝、痺虚水勝を治す。
- ・劇しい関節痛
- ・臨床的には第一の目標が劇しい骨節疼痛である。脉は浮虚。それに汗出でも短気でも微腫でも悪風でも一つか二つあれば殆ど本方の証たることは誤りない。
- ・急性のものでは淋毒性関節炎、関節リュウマチ、神経痛、骨髄骨膜炎、その他急劇な腰痛、筋痛、ヒョウ疽などにも使う。
- ・慢性ではあるが痛みの劇しいものとして結核性関節炎、関節リュウマチ、神経痛、脱疽などがある。この場合は脉が著明に浮ではなくても虚濇であれば差支えない。

注14

- ・骨関節の劇痛を目標にする。急性慢性を問わず各種の関節炎リュウマチ・骨髄骨膜炎・腰痛・ヒョウ疽・歯痛に使う。
- ・神経痛・筋痛で痛みはげしく汗ばみ小便不利すれば使う。

注15

- ・発熱、尿量減少、極めて疼痛ある急性関節リュウマチ、関節痛、浮腫、手足屈伸不能。
- ・関節リュウマチ、関節炎、神経痛、感冒。
- ・関節疾患：急性多発性関節リュウマチで、痛みが激しく、患部がやや腫れ、赤発し熱感があり、屈伸ができないもの。

注16

- ・リュウマチ

注17

- ・ベーチェット病、慢性関節リュウマチ
- ・体力が中等度以下で、顔色がすぐれず、さむがりであり、また実際にさむけもある。関節がはれてひどく痛み、人が枕もとを歩いても、ひびいて痛む。もちろん、まげ伸ばしもできず、汗がで、息が切れ、ときにはむくみもくる。小便ののが悪い。このような慢性関節リュウマチに、本方はときに劇的な効果を発揮する。
- ・熱はないのが原則だが、ときには、初服で、体温計では相当の発熱をみとめても、前記の症状さえそろえば、効果がある。
- ・急性関節炎、神経痛、カゼ

注18

- ・自覚的：劇しい関節痛、発汗傾向、頭痛、悪寒、尿不利、ときに軽度の浮腫。
- ・他覚的：脉 浮弱又は浮にして軟。舌 乾湿中等度の微白苔。腹 腹力は中等度又はそれ以下で、ときに上腹部に振水音を認める。心窩部に軽度の抵抗並びに圧痛を認めることがある。
- ・節々痛んで、寒さがひどく、頭痛し、洩出で、小便少ない。
- ・関節リュウマチ又は神経痛
- ・陽虚証の感冒の初期で背悪寒のつよい場合
- ・感冒がこじれて、背悪寒だけがとれないもの

注19

- ・関節リュウマチ：急性関節リュウマチで、痛みの激しいとき。
- おかされた関節は赤く腫れて熱感があり、少しでも患部に指や衣服が触れても痛みがひどく、屈伸できないほどで、熱のある場合は、悪寒がして汗が流れるように出る。

注20

- ・関節リュウマチ：急性関節リュウマチで、痛みの激しいとき。
- おかされた関節は赤く腫れて熱感があり、少しでも患部に指や衣服が触れても痛みがひどく、屈伸できないほどで、熱のある場合は、悪寒がして汗が流れるように出る。
- ・急性関節症、神経痛、感冒



注21

・リウマチ: 相当に体力が落ちていて、はれ、悪寒があり、人がそばを通ると「痛い」と騒ぐほどに痛みが激しいという症状の人によく応じる。

・アレルギー性鼻炎: 体力の弱い人で、起床時またはカゼのひきはじめの時期などに、クシャミと薄い鼻水がとめどなく出て、たちまちにチリ紙の半帖くらい使ってしまう。背中が寒く、何となく息苦しく、ふしぶしが痛かったり重だるかったりする。

注22

・極めて疼痛の劇しい急性関節リウマチ、尿量減少、関節熱、屈伸不能

・悪風、発熱、汗出、関節浮腫

・急性関節リウマチ、神経痛、感冒

処方番号：29

処方名：甘麦大棗湯（かんばくたいそうとう）

処方構成：

甘草 5、大棗 6、小麦 20

用法・用量：

湯

しぼり：

体力中等度から虚弱で神経が過敏で、驚きやすく、ときにあくびが出るものの次の諸症

効能・効果：

ヒステリー、不眠症、小児の夜なき、ひきつけ

原典：金匱要略

出典：

解説：

『金匱要略』第 22 章「婦人雑病の脈証と治療」の条に、「婦人が臆躁を病み、たびたび悲傷して泣きわめき、まるで何かにつかれたように見え、度々あくびをする。これは甘麦大棗湯が主る」と述べてある。臆躁とはヒステリーのことである。しかし、漢方では本方の証を大分拡大して応用している。

## 29.甘麦大棗湯

参考文献名		甘草	大棗	小麦
診療医典	注1	5	6	20
治療の実際	注2	5	6	20
処方解説	注3	5	6	20
基礎と診療	注4	3	2.5	14
漢方処方集	注5	3	2.5	14
処方分量集		5	6	20
漢方処方		5	6	20
漢方診療の実際		5	6	20

〔注1〕 神経の興奮のはなはだしいものを鎮静し、急迫性の痙攣を緩解する効がある。ヒステリー、舞踏病、神経症、小児の夜泣き症、不眠症、てんかん、胃痙攣、子宮痙攣、痙攣性咳嗽。

〔注2〕 小児の夜泣き、咽頭の異物感。

〔注3〕 両直腹筋、とくに右側腹筋が攣急し、脳神経系統に急迫の状あるものを目標にする。主としてヒステリー、神経衰弱、ノイローゼ、幼児の夜泣き症、不眠症、てんかんなどに用いられ、また舞踏病、チック病、精神病(うつ病、躁病)、泣き中風、笑い中風、夢遊病、胃痙攣、子宮痙攣、痙攣性咳嗽などに用いる。

〔注4〕 本方は婦人と子供の薬であって、男子にはあまりよく効かない。子供の疳や夜泣き症。

〔注5〕 憂鬱症、精神分裂症、胃アトニー。

処方番号：30

処方名：甘露飲（かんろいん）

**処方構成：**

熟地黄 2-3、乾地黄 2-2.5、麦門冬 2-3、枳実 1-2.5、甘草 2-2.5、茵蔯蒿 2-2.5、枇杷葉 2-2.5、石斛 2-2.5、黄芩 2-3、天門冬 2-3

**用法・用量：**

湯

**しぼり：**

体力中等度あるいはそれ以下のものの次の諸症

**効能・効果：**

口内炎、舌の荒れや痛み、歯槽膿漏

原典：太平惠民和劑局方

出典：

**解説：**

浅田の『方函口訣』に「この方は脾胃湿熱と云うが目的にて、湿熱より来たる口歯の諸瘡に用いて効あり。云々」と記載している。慢性の繰り返す口内炎で、口内の炎症は実証で熱証と考えられるが、体力が衰えてきている病態に適用する。更に「華岡青洲はこの方を以て舌疳を治し極めて験あり。」とも記載している。舌疳とは舌癌のことであるが、臨床では口腔内の悪性腫瘍の治療の補助療法にも用いられる処方である。

### 30.甘露飲

参考文献名		熟地黃	生地黃	乾地黄	生地黄	地黃	麦門冬	枳殼	枳実	甘草	山茵陳	茵陳蒿
漢方診療医典		2.5	2.5				2.5	2.5	2.5	2.5		2.5
漢方処方応用の実際	注1	○			○		○	○	○	○		○
臨床応用漢方処方解説	注2	2.5	2.5				2.5	2.5	2.5	2.5		2.5
金匱要略入門	注3	等分					等分	等分		等分		等分
新版漢方医学	注4	2.5	2.5				2.5	2.5	2.5	2.5		2.5
症候による漢方治療の実際	注5	2			2		2	2	2	2		2
漢方と民間薬百科	注6					5	2.5	2.5	2.5	2.5		2.5
漢方後世要方解説	注7	3			3 (乾地)		3	1		2		2
経験漢方処方分量集		2	2				2	2	2	2		2
続漢方あれこれ	注8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
現代漢方入門	注9	2.5	2.5				2.5	2.5	2.5	2.5		2.5
1000万人の漢方診断と治療の実際	注10	2.5	2.5				2.5	2.5	2.5	2.5		2.5

参考文献名		枇杷葉	石斛	黄芩	天門冬	用法・用量
漢方診療医典		2.5	2.5	2.5	2.5	*1
漢方処方応用の実際	注1	○	○	○	○	
臨床応用漢方処方解説	注2	2.5	2.5	2.5	2.5	*2
金匱要略入門	注3	等分	等分	等分	等分	*3
新版漢方医学	注4	2.5	2.5	2.5	2.5	*4
症候による漢方治療の実際	注5	2	2	2	2	
漢方と民間薬百科	注6	2.5	2.5	2.5	2.5	
漢方後世要方解説	注7	2	2	3	3	
経験漢方処方分量集		2	2	2	2	
続漢方あれこれ	注8	-	-	-	-	
現代漢方入門	注9	2.5	2.5	2.5	2.5	
1000万人の漢方診断と治療の実際	注10	2.5	2.5	2.5	2.5	

\*1 あるいは去天門冬、熟地黄を去る。

\*2 あるいは山梔、黄柏各2.0を加う(浅田家は熟地を去り、方輿輓は天門・熟地を去る)。

\*3 研して末となし、毎服二錢を清水一盞をもって煎じて七分に至り、食後臨臥に滓を去り温服せよ。

\*4 あるいは天門冬、熟地黄を去る。

#### 注1

・胃炎のために食欲がなく、歯や歯齦が腫れて痛み、時には膿血が出る。口腔、舌、咽喉に瘡ができて痛む。あるいは、眼のまつ毛が重なって眼があけていられないものや、眼が赤く充血して腫れたときなどに用いる。(崇蘭館試験方口訣)

・脾胃の湿熱(胃の炎症)による口腔や歯の諸瘡には本方がよい。また黄疸腹満があって、茵陳蒿湯で瀉下したあと、まだ治りきらないものによい。(勿誤薬室方函口訣)

・むし歯、歯齦炎、歯槽膿漏、口腔炎、舌炎、アフター性口内炎、咽喉炎、結膜炎、黄疸など。

#### 注2

・脾胃すなわち消化器系に湿熱があり、裏に才熱があって、しかも胃腸弱く虚証を呈し、口舌・咽喉・歯齦など腫脹糜爛して膿血を出すものによい。

・口内炎・口内潰瘍・歯槽膿漏・壊血病・ルードウィツェ・アンギーナ(口腔底蜂窩織炎)・舌癌・ペーチェット病・歯痛・黄疸・口腔カンジダ症等に応用される。

注3

・胃熱未だ宣びず、齦は腫れ膿を出すを治す。

注4

・口腔、舌、口唇などに慢性の腫物が生じ、あるいは潰瘍のあるもので、炎症のはげしくないもの。  
・歯肉炎、歯槽膿漏、口内炎

注5

・舌疔(舌癌)に用いて著効を得た。(華岡青洲)  
・舌疔には、この方と滋陰降火湯の他には用いるものがない。(浅田宗伯)  
・和剤局方に、甘露飲は「牙疔、出血、口臭、歯齦腫れ痛み、腐爛するを治す」とあり、これは今日の歯槽膿漏にあたる。  
・牙疔といって、歯ぐきよりすざましく日々血出で、血出るにつれて歯齦が腐爛して、なくなり、臭気が強く、後には膿も少しずつ出るものである。その症状の緩慢なものを牙疔といい、甘露飲はその緩慢な牙疔を治すものである。(有持桂里)

注6

・口、舌、くちびるなどのはれもので、炎症症状の激しくないもの。  
・歯肉炎。歯槽膿漏。口内炎。慢性に経過して、疲労の状のあるものに用いる。

注7

・脾胃消化器系に湿熱あり、裏に才熱あって、口舌に瘡を生じ、又は咽喉腫痛するものに用いる。  
・胃腸弱く、熱をかもし、歯齦腫脹又は糜爛して膿血を出す、所謂歯槽膿漏にも用いられる。  
・口舌疾患、歯槽膿漏、壊血病、黄疸(腹満攻下の後湿熱去らざるもの)、ルードウィツシュ、アンギーナ(口腔底蜂窠織炎)

注8

・口内炎:すっかり慢性化して体力が衰え、皮膚までカサカサしてきたときは清熱補血湯か甘露飲が用いられる。

注9

・口内炎:消化器系に湿熱があり、裏に瘀血があって、しかも胃腸弱く、虚証を呈し、口舌、咽喉、歯齦などがはれてただれたり、ウミや血をだすものによい。  
・口内炎、口内潰瘍、歯槽膿漏、舌ガン

注10

・舌癌に用いた。(華岡青洲)  
・ルードウィツヒ・アンギーナに用いて効を得た。(大塚先生)  
・口内カンジダ症による口内潰瘍に効を得た。(細野史郎先生)  
・口内炎、口内潰瘍、歯槽膿漏、舌癌

処方番号：31

処方名：桔梗湯（ききょうとう）

処方構成：

桔梗 2、甘草 3

用法・用量：

湯

しばり：

体力に関わらず広く応用できる。のどがはれて痛み、ときにせきができるものの次の諸症

効能・効果：

扁桃炎、扁桃周囲炎

原典：傷寒論、金匱要略

出典：

解説：

甘草湯に桔梗を加えた処方である。咽喉の炎症に用いるのであるが、ひと息に飲まず、うがいしながら飲むとよい。

### 31. 桔梗湯

参考文献名	桔 梗	甘 草	用法・用量
処方分量集	2	3	左1日量を法の如く煎じ1日2回に服用する
診療の実際	2	3	以上1日量、法の如く煎じ1日2回に服用する
診療医典	2	3	以上1日量、法の如く煎じ1日2回に服用する
症候別治療 注1	2	3	
処方解説	-	-	
後世要方解説	-	-	
漢方百話	-	-	
応用の実際 注2	2	3	
明解処方	2	3	
漢方処方集	1	2	2回に分服。便法、桔梗1.5、甘草3として水半量、常煎法。
新選類聚方 注3	1	2	2回分服。
漢方入門講座	2	3	原方は1日2回分服だがここには3回分服のように分量を訂正しておいた。
漢方医学	2	3	
精撰百八方	-	-	
古方要方解説 注4	4	8	1回に温服す(通常1日2,3回)
成人病の漢方療法	-	-	

〔注1〕 傷寒論には、甘草湯でよくならない咽痛にこの方を用いることになっているので、急性咽頭炎にも用いるが、扁桃炎や扁桃周囲炎で悪寒や熱のないものに用いてよい。扁桃炎、扁桃周囲炎などで、のどが腫れて嚥下困難を訴えるものに用いる。

〔注2〕 1) 咽喉の腫痛に用いる。痛みは相当に強く、甘草湯では治りがたいほどで、化膿の傾向があるとき。

2) 咳がでて、胸が張って苦しく、膿様の喀痰を久しい間喀出しているもの。

〔注3〕 1) 咽頭炎、喉頭炎、扁桃腺炎等で咽痛し発熱しても他の表証がないもの

2) 肺壞疽、肺膿瘍、腐敗性気管支炎等で咳嗽膿性喀痰があるもの、初期または軽症。

〔注4〕 故に類聚方広義にいわく「甘草湯証ニシテ、腫膿有り、或ハ粘痰ヲ吐スル者ヲ治ス」と。この説、能く本方の効用を約言せりというべし。

参考 臨床応用傷寒論解説 大塚敬節著

感冒で悪寒、発熱を訴えて、咽の痛むものは、多くは太陽病であるから、葛根湯、葛根湯加桔梗石膏などを用いるが、軽症の感冒で、発熱がなく、ただ咽に痛みだけを訴えるものには甘草湯を用いる。この場合、咽が急迫状に強く痛むものもあるが、疼痛がそんなにひどくないものもある。この場合、一口ずつ咽に含んで、徐々に飲み込むようにするとよい。ところでもし甘草湯を用いて効がなく、扁桃炎を起こして咽の痛むようなものには桔梗湯がよい。この扁桃炎の場合も、発熱、悪寒、脈浮数があれば、太陽病として処置すればよい。



処方番号：32

処方名：帰脾湯（きひとう）

処方構成：

人参 2-3、白朮 2-3、茯苓 2-3、酸棗仁 2-3、竜眼肉 2-3、黄耆 2-3、当帰 2、遠志 1-2、甘草 1、木香 1、大棗 1-2、生姜 1 - 1.5

用法・用量：

湯

しばり：

体力中等度以下から虚弱で、心身が疲れ、血色が悪いものの次の諸症

効能・効果：

貧血、不眠症、神経症、精神不安

原典：濟生方

出典：内科摘要

解説：

体力の低下した虚弱な人が、顔色が悪く、貧血ぎみで、精神不安、心悸亢進、健忘（ものわすれ）があり、夜はよく眠れず、取り越し苦労ばかりし、あるいは発熱、盗汗があり、あるいは反ってねてばかりいたり、四肢がだるくなり、大便の秘結を訴えたり、あるいは婦人では月経不順をきたしたりする。また考えごとや心配ごとが多く、あるいは下血、吐血などの出血があるものに用いると、山田光胤氏は述べている。

元來、胃腸の弱い虚弱体質のものが、身心過勞の結果、種々の出血を起こして貧血をきたしたり、健忘症になったり、神経症状を起こしたりしたときに用いる方薬である。

### 32. 婦脾湯

参考文献名		黄耆	人参	朮	白朮	茯苓	酸棗仁	竜眼肉	当帰	生姜	乾生姜	大棗	遠志	甘草	木香
診療医典	注1	2	3	3	-	3	3	3	2	1.5	-	1.5	1.5	1	1
治療の実際	注2	2	2	2	-	2	2	2	2	1.5	-	1.5	1	1	1
処方解説	注3	2	3	-	3	3	3	3	2	-	1	1	1	1	1
応用の実際	注4	3	3	3	-	3	3	3	2	1.5	-	2	2	1	1
漢方処方集	注5	4	4	-	4	4	4	4	2	-	1	2	2	1	1
処方分量集		2	3	3	-	3	3	3	2	3	*	1.5	1.5	1	1
漢方処方		2	3	3	-	3	3	3	2	1	-	1	1	1	1

\* 乾生姜に代えるときは1を用いる。

〔注1〕 種々の出血，たとえば腸出血，子宮出血，胃潰瘍，血尿などに用いる。その他，仮性白血病，再生不良性貧血，パンチ病，健忘症，不眠症，神経性心悸亢進症，食欲不進，月経不順，ヒステリー，神経衰弱，遺精，慢性淋疾，療癰の潰瘍が癒となったものなどに応用される。

〔注2〕 虚症で気力，体力ともに弱いものに用いる。

〔注3〕 心と脾の虚で，顔面蒼白，脈腹ともに軟弱で，元気衰え，疲労感を訴え，多かれ少なかれ神経症状をとまなうものの腸出血，子宮出血，胃潰瘍，血尿による貧血と衰弱，パンチ病，健忘病，囊腫腎，不眠症などに用いる。

また神経性心悸亢進症，食欲不振，月経不順，ヒステリー，神経衰弱，遺精，慢性淋疾，療癰の潰瘍などに応用される。

〔注4〕 うつ病。

〔注5〕 胃アトニー，神経衰弱，顎腺腫脹，吐血，肛門出血，遺精。

処方番号：32A

処方名：加味帰脾湯（かみきひとう）

**処方構成：**

人参 2-3、白朮 2-3、茯苓 2-3、酸棗仁 2-3、竜眼肉 2-3、黄耆 2-3、当帰 2、遠志 1-2、柴胡 3、  
山梔子 2、甘草 1、木香 1、大棗 1-2、生姜 1、牡丹皮 2 （牡丹皮はなくても可）

**用法・用量：**

湯

**しばり：**

体力中等度以下から虚弱で、心身が疲れ、血色が悪く、ときに熱感を伴うものの次の諸症

**効能・効果：**

貧血、不眠症、精神不安、神経症

**原典：内科摘要**

**出典：**

**解説：**

帰脾湯の証になお熱状血証の加わったものに応用されるので、柴胡と山梔子が加味されている。帰脾湯は脾胃の虚弱を主治する四君子湯に補血、鎮静、止血の剤を加えたもので、脾胃の虚弱な人が精神的過労が加わり、身心ともに疲労の極に達し、諸種の出血や血尿、蛋白尿などや腎機能障害をおこして、精神不安、不眠、神経症、貧血を訴えるものに適應する。従って出血や血証としては、腸出血、子宮出血、胃潰瘍、血尿等による貧血と衰弱、白血病、パンチ病、月経不順に応用し、神経症状としては、健忘症、不眠、神経性心悸亢進、ヒステリー、神経衰弱、遺精などにも応用される。

### 32A.加味帰脾湯

参考文献名	人参	朮	茯苓	酸棗仁	竜眼肉	黄耆	当帰	遠志	柴胡
診療の実際 注1	3	3	3	3	3	2	2	1.5	3
処方解説 注2	3	3	3	3	3	2	2	1	3
応用の実際 注3	3	3	3	3	3	3	2	2	3
漢方医学 注4	3	3	3	3	3	3	2	2	3
明解処方	3	3	3	3	3	2	2	1	2.5
診療医典	3	3	3	3	3	2	2	1.5	3
後世要方解説 注5	3	3	3	3	3	2	2	1	2.5
治療の実際 注6									

参考文献名	山梔子	甘草	木香	大棗	生姜	牡丹皮	用法・用量
診療の実際 注1	2	1	1	1.5	1.5		
処方解説 注2	2	1	1	1	1		
応用の実際 注3	2	1	1	2	1.5	2	*1
漢方医学 注4	2	1	1	2	1		
明解処方	2.5	1	1	1	1		
診療医典	2	1	1	1.5	1.5		
後世要方解説 注5	2.5	1	1	1	1		
治療の実際 注6							

\*1 血剤としてさらに牡丹皮を加味する

〔注1〕 心悸亢進、健忘、不眠、出血等を目標とし、やや熱状を兼ねたもの。虚弱体質の者、或は病後衰弱せる時などに、過度の神経を労している者。

〔注2〕 胃腸の弱い虚弱体質者が身心過労の結果、種々の出血を起して貧血をきたしたり、健忘症となったり、神経症状となり、かつやや熱状の加わったときに用いる。

〔注3〕 体力の低下した虚弱な人が顔色がわるく貧血ぎみで精神不安、心悸亢進、健忘があり、夜はよく眠れず、取り越し苦労ばかりし、あるいは発熱、盗汗があり、あるいは反ってねてばかりいたり、四肢がだるくなり、大便の秘結を訴えたり、あるいは婦人では月経不順を訴えたりする。また考えごとが多く、あるいは下血、吐血などの出血があり、身体が衰弱して熱のであるもの。

〔注4〕 虚証で貧血、心悸亢進、健忘、不眠、出血の傾向があり、脈にも腹にも力がなく、気力の衰えたもの。

〔注5〕 遺精白濁、頭上白屑、陰門熱痒の応用を加える。

〔注6〕 原因不明の貧血、悪性貧血、再生不良性貧血にこの方を用いて著効を得たことあり。